

Title	<批評・紹介>河南安陽遺寶 梅原末治著
Author(s)	澄田, 正一
Citation	東洋史研究 (1940), 6(1): 61-62
Issue Date	1940-12-20
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/145722">http://dx.doi.org/10.14989/145722</a>
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

## 批評・紹介

### 河南安陽遺寶

梅原末治 著

昭和十五年十月 京都小林寫眞製版印刷所發行

「示された事實をばそれ自體に即して認識することこそ考古學の第一義たるを切に思ふのである」との態度を堅持される著者が、支那古代遺物の考古學的研究に於いてとられた方向は大體二つであつた。その一は出土地伴出物の不明な散在せる遺物の嚴密な形式學的選擇による聚成的研究であり、その二は地域的な一括遺物の研究であつた。後者に屬する最近の著しいものとして『洛陽金村古墓聚英』『紹興古鏡聚英』を見たが今や更に本書を加へるにいたつたのである。

さて本文載する昭和三年以來事變直前まで中央研究院の歴史語言研究所考古組の手によつて行はれた「調査經過」を要約すれば發掘作業は大體三段階に分たれる。第一期は大體小屯を中心となされたがそれが漸次擴張され所謂白陶・黑陶・彩陶なる三文化時期の層位を示した後岡遺蹟或ひは小屯に於いて版築基壇址等が檢出され、遂には第三段たる侯家莊を中心とした副期的な古墓發掘がなされその數實に千を超えたのである。

著者は既に早く昭和四年秋遺蹟を踏まれ昭和十一年春南京に行かれてゐるが、『安陽發掘報告』や米のクリール、佛のペリオ教授の見聞記等を參酌の上、著者自身の右に依る見聞によつて次の「遺蹟の概観」がなされてゐる。遺蹟の中重なるものは版築の建築基壇址と古墓であるが、記述中特に興味あるは古墓の土砂中よりあらはれた、濃厚な朱彩色に黄・綠等の色を加へて銅器文と同様な虺龍文を施した黃土である。この圖文に就いて著者はペリオ教授等の説とは別に、もと木材に刻出着彩されたものが器の腐朽によつてその痕を土面に印したものであらうと推し、各種の木器の外にその大さ等から棺槨に比すべきものをも含むであらうとされたことは、著者が常に主張してやまれない木器と銅器との關係についての説と併せて注目すべきものがある。その他犬の埋葬穴、陪葬墳に見られる殉葬の事實等判つたが、更にこれら古墓の構造は潯縣、新鄭縣、洛陽金村のそれと相似てゐることが指摘されてゐる。

次に洋の東西に四散した所謂安陽出土品の中選擇されたものゝ解説であるが、それは加奈陀トロント博物館所藏のホワイト師蒐集品を除いて各方面に互つてゐる。此の遺物の選擇がかつて著者が南京に於いて親しく觀られた發掘出土品に據られたことは、本書に附された百に近い圖版の資料を價值附けるものなることは言を俟たない所であらう。利器類、武器類附溶范、石

製品及玉器・雕牙骨器類と項を分つて、或ひはそれ自體に即し或ひは他との關係に於いて著者獨特の綿密な考察がなされて所謂安陽物の性格を描出されてゐる。

その性格として著しきは容器に於ける形の類似せることであり裝飾文の同式なることである。即ち前者については骨角・玉石等の容器の形が材料による制限の許す限りに於て銅製尊彝の形に緊密な關係を保つことによつて知られる。後者に就いては各々の遺物に示される如く繁雜な動物文が一貫した主流をなすのみでなく、更に細部に於ける特殊な所謂クセにまで相似たものが見出される如きである。

この二つの著しい性格が本書に於いて取扱はれた所傳殷代の安陽出土品の性格であるが著者はその性格觀に條件を附される。即ち取上げられた遺物が何れも美術品乃至商品化した貴重品に偏してゐることはこれらの遺物が主として當時の支配階級のものであり、従つて當時の一般民衆の日常用器を缺いてゐることを示してゐる。さればその性格觀は當代文化全體の上からではなくまでも一面的であることである。

かくて著者は所傳安陽出土品の性格觀を立てられてゐる。更にその考古學的立場からとかく看却されがちな當時の普遍的遺物たる土器等に對する將來の研究を促されてゐるが、かくしてはじめて當代文化の全體的な把握が可能なることはまことに著者

の言の如くである。

〔澄田 正一〕

## 昭和十三年度朝鮮古蹟調査報告

四六倍版、九一頁、圖版八八葉、  
昭和十五年九月發行 非賣品

朝鮮古蹟研究會の半島遺跡遺物に關する諸調査は、今やより科學的にして、より着實なる方法を以て行はれ、吾人の朝鮮古代文化に對する知見を深めるに緊要なる基礎的諸事實を提出してゐるのはよろこばしい事實である。本書はその昭和十三年度に於いてなされた調査の報告であつて、前年度にも増して新しい種々の事實に關する簡潔にして、而かも要領を得た記述から成つてゐる。即ち卷頭の梅原末治研究員の同年度古蹟調査概要に見らるゝが如く、調査の主對象となつたものは、三國鼎立時代に於ける高句麗、百濟、新羅の三國の古代遺跡であるが、一部分それ以前の史前のものにも及び、其の範圍は全鮮に亘り、且つ古代寺址に於いて著しいものがある。

さて先づ高句麗の遺跡としては、小泉顯夫・米田美代治兩氏の調査に係る平壤府外清岩里廢寺址が擧げられる。この廢寺は後、高麗時代に重創を見た如くであるが、其の間に高句麗時代の遺構と遺物とを出して、同代寺址の研究に調期的な事實を提示した。即ちその伽藍は中門（門址）、塔（八角殿址）、金堂（中央大殿址）、講堂（數碑殿址）等と思はれる主要建築物が南